

2016年7月16日(7月17日微修正) 8月1日改訂 8月3日再訂 10月10日三訂 12月6日四訂

中国・ベトナムの漢文文献の中の南シナ海方面の記述について 補遺 16

嶋尾稔 (慶應義塾大学言語文化研究所)

これまで、19世紀の前半に南シナ海とくにパラセル諸島側に関する西欧の地図表現が大きく変化すること、その移行にイギリス東インド会社の水路研究者 Horskburgh が関わっていることを述べてきたが、不十分な記述に止まっているので、ここで改めてイギリスによる南シナ海方面の水路研究の発展について検討しておきたい。

イギリスでは、アジア方面の航海・航路に関する情報はイギリス東インド会社に集積されていたが、オランダやフランスと異なり、18世紀の中葉に到ってもそれらの情報を整理分析する部門を持たなかった。その状況を改革したのが、Alexander Dalrymple である。東インド会社の事務員として現地で航海に携わったのち帰国、1779年に会社の水路部長 hydrographer に任命され、会社を集まる航海の諸情報を体系化することに努めた。

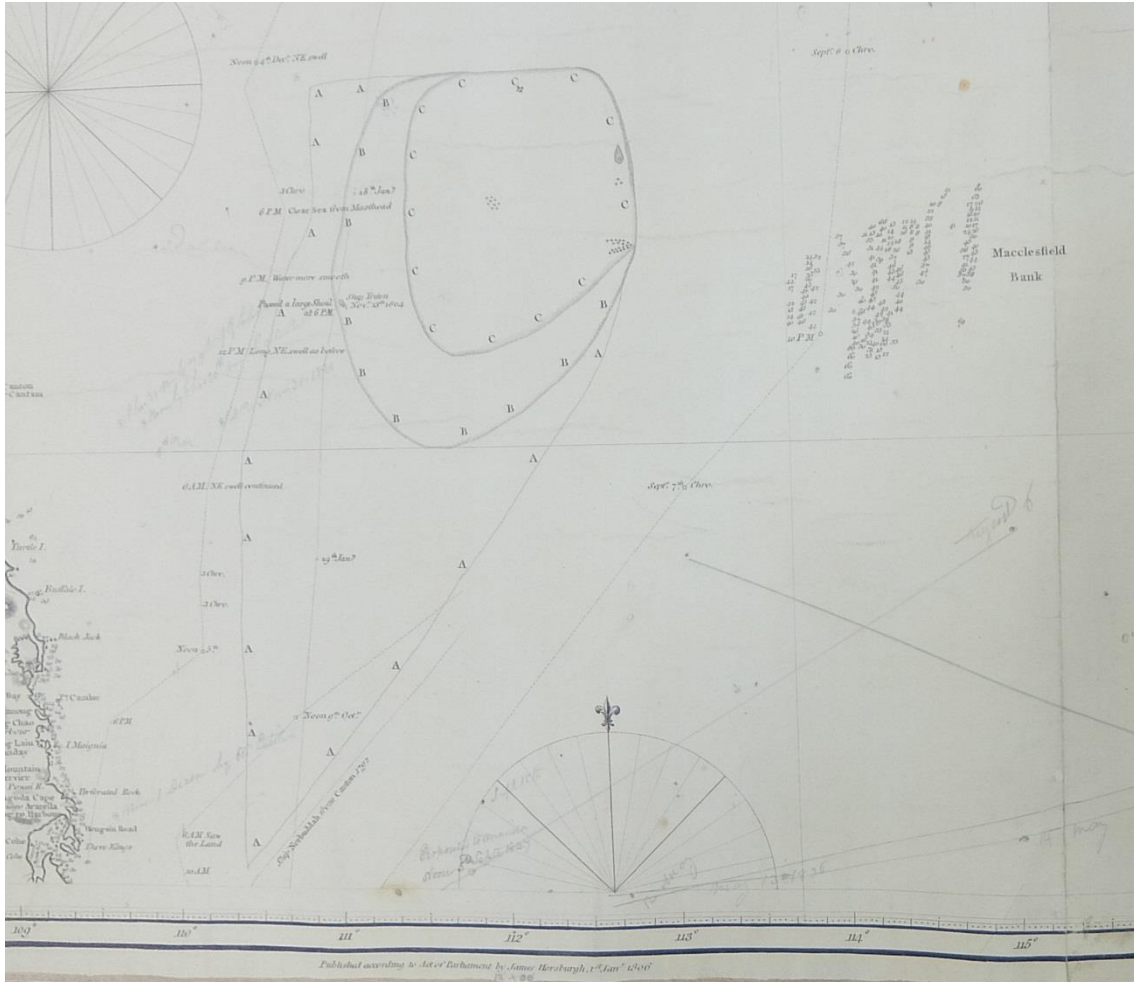
Dalrymple は、1795年に海軍水路局の発足に当たって初代の水路局長 hydrographer となった。Dalrymple は、水路研究で先行するフランスの hydrographer である d'Après de Manneville と交友関係を持ち、1771年には当時の知識を集約した南シナ海・東シナ海方面の海図を出版している (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b5962988c/f1.item>) [Pham 2016: ¶ 34-35; Fry 1970: 222-223, 225]。こののち、南シナ海・東シナ海方面の航路の認識は、ムンバイに拠点を置く海軍 (Bombay Marine、のち Indian Navy) の測量事業とカントリートレーダーの活動の活発化によって、情報量と精度をましてゆく。イギリス海軍 (ブロートン) による測量事業が日本にも及んだことはよく知られている。

Horskburgh は、はじめカントリートレーダーとして中国貿易に従事していたが、自分の乗り組んでいた船の座礁の経験から水路研究を志し、Dalrymple の奨励を受け 1805年以降アジア方面の多くの海図を出版、また 1808年には重要な水路誌 *Directory for Sailing to the East Indies* を編纂した (この本は 1836年に彼が他界した後も版を重ねた。二版以降、*India Directory or Directory for Sailing to...*と改名、第七版[1855年]まで刊行されている。)。1810年に Dalrymple の後継者としてイギリス東インド会社の hydrographer に就任している。1820年代以降海軍水路局による海図・水路誌の編纂と販売が拡大すると東インド会社の水路研究における役割は縮小するが、1850年代まで John Walker によって海図・水路誌の出版は続けられた[Cook 2002; 横山 2001: 273-282]。

パラセル方面の研究・調査について具体的に見ていきたい。Horskburgh は、1804年にパラセル諸島の調査を計画したが、実現しなかった[Cook 2002: 135; Fry 1790: 253-255]。おそらくこの調査のためにパラセルに関する従来の諸情報を収集整理していたのであろう。彼が 1806年に出版した南シナ海・東シナ海方面の海図[Horskburgh 1806]にその研究成果を見る

ことが出来る（この海図は最近慶應義塾大学言語文化研究所が購入し所蔵している）。

これまで19世紀の南シナ海認識の変化を空想のパラセルから現実のパラセルへの移行というふうに簡単に述べてきたが、この海図の記述を見ると、事はそう単純でなかったと知られる。Horsburghは、危険地帯をA,B,Cの三つの水準に分けて記している。



AAA おおよそ北緯 12 度 40 分～17 度 東経 110 度 20 分～112 度 50 分

BBB おおよそ北緯 15 度～17 度 東経 111 度～112 度 50 分

CCC おおよそ北緯 15 度 30 分～17 度 東経 111 度 30 分～112 度 50 分

現在のパラセル諸島は、Triton Islandを除き、CCCの範囲に収まる。これらの区分についてHorsburghは次のように記している。

AAA Within the line thus marked, is the limit of Probable Danger amongst the Group – of Shoals called Paracels ; also called Triangles, Spectacles, Amphitrite, St. Anthony’s Girdle, Lincoln &c.

BBB Within the limit thus marked, there is probably greater Danger, than within the limit marked A.

CCC Within the limit marked thus, there are probably many Reefs, Sand Banks, and some low Islets, with bushes or trees on some of them, and fresh water on one or two of them.

AAA に出てくる Triangles, Spectacles, Amphitrite, St. Anthony's Girdle は同じ島嶼群の別名である[Huddart 1801:447]。補遺 7 で言及した Lunnets もこれらと同じ島々を指している。現在のパラセル諸島は、Crescent Group と Amphitrite Group からなり、Lincoln は後者に含まれるが、この時点では、Amphitrite は Paracels とは別扱いであり、Lincoln も Amphitrite とは別扱いであった。

BBB の範囲を AAA の範囲よりも危険であるとみなし、危険海域の範囲をより限定する方向にあったことが看取できる。BBB が得体のしれない危険な空間であるのに対して、CCC はより具体的なイメージで描かれている。実際のパラセルの認識まであと一步のところまで近付いていたのであり、Horsburgh はそれを自分の目で確かめたかったのであろうが、それは果たせなかった。

この海図の出版の翌年 1807 年より海軍の Ross と Maughan が南シナ海方面の測量調査を開始した (“The Surveys of the Indian Navy” *The Foreign Quarterly Review* vol.38(1945).p245(American edition).)。そのなかにパラセル諸島も含まれている。1808 年にはその測量調査の成果であるパラセルの海図が Horsburgh によって出版された。1848 年の東インド会社出版海図一覧には下記の 3 点が載せられている[House of Commons 1851: 33]。

155 General Chart of the Paracels, two sheets, Lieutenants D.Ross and P. Maughan, 1808.

156 Western Group of the Paracels, Lieutenant D.Ross 1808.

157 Amphitrite Islands, forming part of the Paracels, Lieutenant D.Ross 1808.

補遺 7 (六訂) において、Thomas Suarez の著作に引用された 1808 年のパラセル諸島の海図の写本に言及したが、この写本は上記の General Chart of the Paracels, two sheets のうちの一枚の写本であろう。

実地調査の結果に基づいて実際のパラセルを個別的に描いたこれらの海図の情報は、早速より広域の海図に採用されている。(うかつにもこれまで見落としていたが) 1812 年に改訂された Arrowsmith による東インド諸島の海図が、南シナ海上に実際のパラセルを描いている。

Chart of the East India Islands, Exhibiting the several Passages between the Indian and Pacific Oceans; Inscribed to the Commanders and Officers of the British Ships

Navigating those Seas, by A. Arrowsmith. Additions to 1812. engraved by S.I. Neele,
352 Strand.

David Rumsey Historical Map Collection (<http://www.davidrumsey.com/>)

Barry Lawrence Rudermab Antique Maps (<http://www.raremaps.com/>)

さらに既に述べたように 1815 年には、Horsburgh の 1806 年版の海図の改訂版が、初版のパラセルの記述を一新して、新情報を提供するものとなっている。1817 年にベトナム阮朝がわざわざマカオ船から購入した地図について補遺 7 では新旧いずれとも定めがたいとしたが、イギリスにおける南シナ海に関する新しい海図の動向を考えると、実際のパラセルを記した新しいタイプの地図を阮朝が入手した可能性が高いように思われる。

スプラトリー方面の認識の変化はどうであろう。Dalrymple が南シナ海の危険箇所に関する諸報告のリストを作成している [Dalrymple 1801]。そのうちスプラトリー諸島の緯度の範囲に入る事例が 66 件挙げられている。必ずしも現在の島嶼や岩礁や浅瀬に正確に対応しているわけではないが、この海域が危険地帯と認識され、その情報が東インド会社に集積されていたことが知られる。このリストには、island, bank, shoal, reef, breaker, rocks, sand が挙げられているが、island として報告されている事例を抜き出すと以下の通りである (A, B, C, D の区分けは著者)。

A

11.32 113.29

Low Island, about 1 mile extant, covered with shrubs and seawreck, at east side a dry sand bank about a mile extent.

Island N.N.W. 4 miles, no ground at 85 fathoms

Saubut Jung 1763

B

11.11 113.8

Island

Capt. *Nat. Bacon*, 1768 & 69.

11.2 111.40

Low Island

Effex, 1762

10.58 112.12 Do. with sand to southward and breakers 2 miles N.W. from the island.

Falmouth, 1762

11.1 115.17

Low Black Island, surrounded with breakers, and has a bank of white and reddish

sand at south point, and at north a long ledge of breakers and green water; lies N.E. and S.W.

Cavallo Marino 1752

C

10.42 113.26

Small Island with a reefs of breakers

Sieur *Gossard*, 1741

10.35 112.38

1st Island by Dolphin

Dolphin, 1767

D

10.20

Small Low Islands

Ganges, 1759

緯度、経度ともに現在の島に正確に一致するものは無いが（とくに経度のズレは大きい）、Aが North Danger、Bが Thi Tu Island and Reefs、Cが Loaita Island and Reefs、Dが Tizard Bank and Reefs に対応しているように見える。ただし、Horsburgh の 1806 年版の海図の 1815 年の改訂版[Horsburgh 1815b]を見ると、「*Isle & sand Sabut Jung*」のすぐ北に二つの小島があり、このペアの島が North Danger に相当し、Sabut Jung 発見の小島が Thi Tu Island に相当するような配置となっている。

David Hancox と Victor Prescott によれば[Hancox & Prescott 1995:34]、スプラトリー諸島方面の測量事業は、1840 年代から 60 年代に集中的に行われた。1843~1847 年の Belcher の調査、1848~1853 年の Bate の調査、1863 年の Ward の調査、1862 年、1866 年、1867-68 年の Reed の調査である。なかでも 1867-68 年の Reed の調査はスペイン海軍の Claudio Montero と共同で行われ、スプラトリー諸島に関する認識は大いに深まった。

1840 年代にこの海域の認識がかなり深化したことは、1848 年に改訂された Horsburgh の海図から見て取れる（1823 年出版の海図の改訂版であるが、先述のとおり 1836 年に彼は他界しており、死後の改訂版である。1823 年版は Sheet 番号が 1806 年版と変更になっているようである。1806 年版ではパラセル側が Sheet 1 であったが、1823 年版ではスプラトリー側が Sheet 1 になっている。James Horsburgh. *China Sea Sheet 1*. London. [Durand 2013])。非常に多くの island, reef, shoal などが記されているが、現在使われている英語名称[浦野 1997: 20-25; Nguyễn 2013: 233-243]に対応するものが、少なくとも 46 件はある。疑わしい危険箇所も残すという方針と思しく、position uncertain と記された岩礁類も多く、同じ名称のものが別の箇所に複数描かれている場合も少なくは無い。と

はいえ、スプラトリー側についても西欧の航海者の知識は着実に増えていると言えよう。

この海図では、North Danger のあたりには「two islands」と正確に記されている。Thi Tu Island and Reefs のあたりには「Sand/Reef/N.W.Island」、Loaita Island and Reefs 近辺には「Sand/South I./Shoal & Sand」と記されているが、Tizard Bank and Reefs としき箇所は若干経度もずれており「Western Reef/Great Reef/Reef」とあるだけで、Island は記されていない。

古書店のサイトで、1886年のイギリス海軍の南シナ海海図 *China Sea Compiled from the Latest Government Surveys 1886* を見つけることができた

(<http://www.geographicus.com/P/AntiqueMap/ChinaSea-admiralty-1886>)。この海図になると、スプラトリー諸島北端の海域の記述はほぼ正確になり、Titu, Loai ta, Itu Aba, Nam yit など現在も使われている地名が記されている。

プラタス島（東沙島）とスカボロー礁について西欧の航海者は夙に正確な認識を有していたようである。Dalrymple の危険地帯のリストにも Pratas と Scarborough Shoal の名前で記載されている。Pratas の報告は3例あり、一番古いものは1761年である。Scarborough Shoal の報告は2例で古いものは Scarborough による1748年の報告である [Dalrymple 1801]。Horsburgh の1806年の海図にも両者は明確に記されている [Horsburgh 1806]。これは、シンガポールから広東に向かう一つの重要な航路上にこれらが存在していたからである。Pulo Condore から Pulo Sapata を経てルソン島の北端 Cape Bojador を目指し、そこから広東を目指すという航路を取る場合、Scarborough Shoal は Pulo Sapata—Cape Bojador の区間の障害であり、Pratas は Cape Bojador—広東の区間で要注意箇所であった [Huddart 1801: 453-456]。

海洋中の危険箇所の情報を収集して正確な認識を構築しようとすることは、海洋管理の基本であろう。ベトナム阮朝のパラセル調査は、このような西欧の動きに対する対抗的な行動と見ることもできよう。この間、清朝は南シナ海に対して何もしていないようである。

Cook, Andrew. S. 2002. “Establishing the Sea Routes to India and China: Stages in the Development of Hydrographical Knowledge.” in H.V. Bowen, M. Lincoln & N. Rigby eds. *The Worlds of the East India Company*. Suffolk: The Boydell Press.

Dalrymple, Alexander. 1801. “Enumeration of the shoals & c. in the China Seas.” in Joseph Huddart ed. *The Oriental Navigator*, pp484-486.

Durand, Frédéric. 2013. *Maps of Malaya and Borneo : discovery, statehood and progress : the collections of H.R.H. Sultan Sharafuddin Idris Shah and Dato' Richard Curtis*. Kuala Lumpur : Editions Didier Millet ; Jugra Publications.

Fry, Howard T. 1970(reprint 2014). *Alexander Dalrymple (1737-1808) and the Expansion of British Trade*. London & New York: Routledge.

Hancox, David & Prescott, Victor. 1995. *A Geographical Description of the Spratly Islands and an Account of Hydrographic Surveys amongst Those Islands*. Durham: International Boundaries Research Unit.

House of Commons. 1851. *Return: East India (Public Works, India)*

Huddart, Joseph ed. 1801. *The Oriental Navigator; or, New Directions for Sailing to and from the East Indies, China, New Holland &c.* 2nd edition. London: Robert Laurie and James Whittle.

Horsburgh, James. 1806. *China Sea*. Sheet 1st. To James Drummond Esquire in acknowledgement for his laudable endeavours towards perfecting the Navigation of the China Sea this Chart is inscribed by his Obliged James Horsburgh.

Horsburgh, James. 1815a(1806). *China Sea*. Sheet 1st.

(<http://collections.rmg.co.uk/collections/objects/540325.html>
National Maritime Museum, Greenwich, London)

Horsburgh, James. 1815b(1806). *China Sea*. Sheet 2st.

(<http://collections.rmg.co.uk/collections/objects/540326.html>
National Maritime Museum, Greenwich, London)

Nguyễn Việt Long. 2013. *Lễ Phái: Luật Quốc tế và Chủ quyền trên Hai Quần Đảo Hoàng Sa và Trường Sa*. TPHCM: Nhà Xuất bản trẻ.

Pham, Charlotte Minh Hà. 2016. “European Navigation, Nautical Instructions and Charts of the Cochinchinese Coast (16th-19th Centuries)”. *Moussons* [En ligne]27 (mis en ligne le 17 mai 2016, consulté le 04 décembre 2016.

URL : <http://moussons.revues.org/3544>)

Suarez, Thomas. 1999. *Early Mapping of Southeast Asia*. Singapore-Hong Kong-Indonesia: Periplus Editions.

浦野起央.1997.『南海諸島国際紛争史』東京：刀水書房.

横山伊徳.2001.「19世紀日本近海測量について」黒田日出男他編『地図と絵図の政治文化史』東京：東京大学出版会.